二十巻本『搜神記』「紫玉」条の成立

佐野誠子

はじめに

『搜神記』は、『晋書』巻八二・干宝伝に晋代の歴史家干宝が著したとの記述があり、『隋書』『旧唐書』経籍志史部雑伝類、『新唐書』芸文志子部小説家類に三十巻として著録されているが、宋代以降の書目では姿を消してしまう。現在我々が目にすることができるのは、明代末期に出現した二十巻本、八巻本、及び一九〇〇年頃に敦煌から出土した敦煌本の三種類である。これらの『搜神記』が干宝の原著そのものであるのかということについては明末の時点で既に疑問がもたれていたが、このうち二十巻本は唐宋時代の類書に引用されている条が多数あり、また内容別に巻立てされている点[1]などから最も干宝の原著の面影をとどめていると考えられている。しかしこれはあくまでもより原著に近いというだけであって、現行の二十巻本＝干宝の原著ではない。現在この点に対して慎重に考慮する研究者もいるが[2]、またその一方で「二十巻本が干宝の原著に近い」という命題が何時の間にか「二十巻本は干宝の原著である」という命題にすり替わってしまい、二十巻本の全ての内容を晋代の干宝が記録したものとして議論する研究者も多い。筆者はこのような態度に疑問を感じている。『搜神記』所収の一条一条について、どの文献の第何巻に引用されてい

るという指摘はあっても、[3] 実際にどのような関係にあるのかについての細かな吟味はあまりなされてない。例えば二十巻本『搜神記』の巻十六に収められている「紫玉」の話の概要は以下のようなものである。

呉王夫差の娘紫玉は、韓重と好き合っていた。韓重は両親に、紫玉との結婚を夫差に求めるよう頼み、斉魯の地方へ遊学に出かけた。しかし夫差は結婚のことを聞くとそれを許さず、紫玉はそのために気が昂じて死んでしまった。遊学から帰った韓重は両親から紫玉の死を知り、墓に詣でて悲しんだ。すると墓から紫玉が現れて、歌を歌い、韓重に墓に一緒に入るよう願い、韓重は躊躇したものの結局同意し、二人は三日間夫婦の契りを交わした。韓重が墓から出る際、紫玉は宝物を取り出して、夫差に挨拶するよう願った。韓重がその通りにすると、夫差は話を信じず、韓重が墓を発いたものだと疑い、韓重をつかまえようとした。逃げ出した韓重が紫玉の墓に行き訴えると、紫玉は夫差の前に現れて、韓重の疑いを晴らした。それを見た母親が紫玉を抱こうとすると、紫玉は煙のように姿を消した。

原文では五百字以上にもなる、非常に内容の整った話である。またこの条は文字の異同が多少あるが『太平広記』（宋・李昉等編、以下『広記』と略）巻三一六・鬼に出典を『録異伝』として収められている。しかし、明末の二十巻本出現以前に、この五百字の文章を『搜神記』の文章として引用した書物は存在しない。一方唐宋の頃の類書にも、この呉王の娘の話が何箇所にも収録されて、出典は『搜神記』とされている。よって呉王の娘の話が何等かの形で原本『搜神記』に収録されていた可能性は非常に高いだろう。しかしこれら類書に引用された文章は筋は一致するものの、とても短い。この場合、二十巻本『搜神記』に「紫玉」の話があり、類書にも『搜神記』からとして同一の話が収められているからといって、現在の二十巻本『搜神記』の文章自体が原本『搜神記』に存在するといっていいのだろうか。筆者は二十巻本『搜神記』の「紫玉」の条は、原本『搜神記』にはみえず、後世成立したものと考える。また、この紫玉の話には原型がある。まずこの成立過程をたどりながら原本『搜神記』の記述について考えてみたい。そし

てその上で現行の「紫玉」条の文章について検討したい。本論はこの検討により、原本『捜神記』、また現在の二十巻本『捜神記』のそれぞれの性格についての探求を試みようとするものである。

「紫玉」の原型

この「紫玉」の話には、原型と目される話が存在することが既に指摘されている。(4) 筆者もそれらを原型とみなすことに対して異論はないが、以下原文をみながらより詳細な検討を加えていきたい。

「紫玉」の話の舞台は戦国時代の呉である。しかし、この呉王の娘に関わるエピソードは『史記』や『春秋左史伝』といった正当な歴史書には見当たらず、『呉越春秋』（後漢・趙曄？撰）『越絶書』（漢・袁康？撰）といった、成立年代や著者もはっきりとしない書物にみえる。まず、『呉越春秋』闔閭内伝第四に収められる話をみてみよう。

呉王有女滕玉、因謀伐楚、與夫人及女會蒸魚、王前嘗半而與女、女怒曰「王食魚辱我、不忘久生。」乃自殺。闔閭痛之葬于國西閶門外。鑒池積土、文石為椁、題湊為中、金鼎、玉杯、銀樽、珠襦之寶、皆以送女。乃舞白鶴於呉市中、令萬民随而觀之、還、使男女與鶴俱入羨門、因發機以掩之。殺生以送死、國人非之。

呉王には滕玉という娘があった。王は楚を討とうと思ったので、夫人や娘と共に蒸し魚を食べた。王は先に半分を食べて娘に与えたところ、娘は怒って言った。「王が魚を食べさせて私を辱めましたのは、一生忘れません。」そしてとうとう自殺してしまった。闔閭はこれを痛ましく思って、国の西方閶門の外に葬った。池を掘り土を盛り、模様のある石で棺桶を作り、大木を積み重ねたものを内部とした。金の鼎、玉の杯、銀の酒器、珠で飾った埋葬用の服などの宝を、全て娘に贈った。そうして白い鶴を呉の町で舞わせ、多くの人に随行させ見物させた。更に、男女と鶴を共に墓門に入れ、仕掛けを作動させて閉じ込めてしまった。殺生をして死者を慰めたことを、国民は非難した。

この文は各種類書にも引用されており、[5] これらの間に文字の異同は多々あるものの『呉越春秋』の元々の書物にこの様な内容の条が確実に記録されていたといえるだろう。また、ここでは夫差の娘ではなく、夫差の父親にあたる闔閭（闔廬とも。紀元前五一四―四九六在位）の娘となっている。これは闔閭三年（紀元前五一二）の出来事として『呉越春秋』に収められているが、楚の国を攻撃したというのは『史記』でも同じ年のこととして記録されている。この戦いの前に蒸し魚を食べるという行為は他書にはみつからず、その行為の示す意味は不明である。また、食べ残しを食べさせられたために自殺までしてしまうという展開は、現代人の目からすると理解に苦しむ。

次に検討するのは『呉地記』（唐・陸広微？撰）所引の『越絶書』佚文であり、現行の『越絶書』にはみられない。しかしこの佚文は、より二十巻本『搜神記』の「紫玉」の話に近い内容である。また『呉郡図経続記』（宋・朱長文撰）巻下・塚墓の項の記述も『呉越春秋』からとしての、前記滕玉の話（滕玉の名は記されず、ただ呉王小女とする）を挙げ、一説として出典は示さずに以下の文とほぼ同じ文を挙げており、両者が密接な関係であるとみなしていたことを示している。

夫差小女、字幼玉。見父無道、輕士重色、其國必危。遂願與書生韓重為偶、不果、結怨而死。夫差思痛之、金棺銅槨、葬閶門外。其女化形而歌曰「南山有烏、北山張羅。烏既高飛、羅當奈何。志願從君、讒言孔多。悲怨成疾、没身黄坡。」

夫差の娘は、字を幼玉といった。父が無道で、士人を軽んじ色を好むのを見て、国が危機に瀕していると思った。そうして書生の韓重の妻となることを願い出たが、それが果たせずに、恨みを抱いて死んでしまった。夫差はこのことを悲しみ、金の棺桶を銅でくるんで、閶門の外に葬った。その娘は姿を現して歌った。「南の山に烏がおり、北の山には網が張ってあります。烏はもう高い所を飛んでいるのに、網が何の役に立つのでしょう。心ではあなたに従おうと願っておりましたが、讒言がとても多く、悲しい気持ちから病気になってしまい、体は黄泉の

国へ行ってしまいました。」

ここでは夫差の娘が韓重という男性の妻となることを願い、果たせずに死んでしまったことや、夫差の娘が墓から現れ歌を歌うなどの内容が初めて出てくる。滕玉の話と幼玉の話、双方は大きく隔たっているが、娘の葬られた場所が共に閶門であることから、何かしらの関係があると考えてよいだろう。また『越絶書』外伝記呉地伝第三にもまた、闔閭の子女の墓に関して鶴を舞わせたことや、殉葬の記述もあることから、閶門は元々闔閭の墓であり、闔閭に関係した話が先に存在したと考える方が妥当だろう。

ではなぜこのような変化が起こったのだろうか。呉越の興亡は呉王夫差、越王勾践の間の臥薪嘗胆などの故事を中心に語られる。この時夫差は暴君で好色とのイメージが附されている。中国において、後世暴君と称される人物に対して、事実でない他人の故事までその人物と結び付けられて、その暴君のイメージを更に強化しようとする傾向がある。ここでの闔閭から夫差への変化もその流れで理解できるのではないだろうか。例えば韓重の登場も、この韓重という名前は他書には全くみられず、どのような人物であったか不明だが、「書生」と記されていることから知識人的な人物であり、呉王夫差の娘は韓重を婿として迎えることで呉の政治を改めようとの意図があったと読みとれる。その娘の思いを踏みにじる夫差は暴君というべきだろう。『呉越春秋』も『越絶書』も精確な成書年代は不明なので文献的にどちらが先に成立したとはいえない。ただ闔閭の娘の話の方が、史実と時期が一致することからもより古い話であることを思わる。文字化以前の話としての成立が、闔閭の娘の方が前だということである。

『呉越春秋』や『越絶書』は成書時から正当な歴史書とはみなされていなかった。例えば『隋書』経籍志では「雑史」と分類され、序文はこれら雑史の書は巷間の説を内容としていて、怪しげな代物であると述べている。(6) これら二種類の呉王の娘の話も、世間で伝えられていたものが、記録されたとみるべきだろう。また、前後関係のある二つの話が、別々に記録されているがこれは幼玉の話が成立したのちも、滕玉の話も滅びずに伝わり続けていたためである。

ちなみに先にみた『呉越春秋』で墓を造成する時に池を掘ったとあったが、これは女墳湖を指しているのだろう。呉王の娘の墓は、女墳湖と結び付けて語られることが多い。女墳湖の名前は『呉越春秋』『越絶書』の両書にはみられないが、『太平御覧』（宋・李昉等編、以下『御覧』と略）巻六六・地部・湖の出典を『郡国志』とする文章などにみられる。この女墳湖は実在した地名のようで、唐末の詩人、皮日休、陸亀蒙の唱和詩集『松陵集』巻六には、「女墳湖」と題した唱和詩が収められている。この二首の詩には呉王の娘に関する伝承が混同して用いられているところが興味深い。[7] 思うに、滕玉の話、幼玉の話の両方が、同時にその地域で伝承として伝わり続けていたのだろう。

原本『搜神記』の「紫玉」

ここからは原本『搜神記』に収められた呉王夫差の娘の話について考えてみたい。原本『搜神記』に夫差の娘の話が収められていたことは確かであろう。なぜなら『芸文類聚』（唐・欧陽詢編、以下『類聚』と略）『御覧』といった唐宋の類書に紫玉の話が『搜神記』からとして引用されているからである。末尾に『呉越春秋』『越絶書』佚文も含めた呉王の娘の話に関する表を附したので参照されたい。類書にみえる文章はいずれも短く、例えば『類聚』巻八四・宝玉部・珠の項には『搜神記』の文章として以下のように記されている。

呉王夫差女名玉、死亡。童子韓重至塚前哭祭之、女乃見形、將重入塚、遺徑寸明珠。

呉王夫差の娘は名前を玉といい、死んでしまった。若者の韓重は墓の前に来て哭して玉のことを祭った。すると娘は姿を現して、韓重を墓に入れ、さしわたし一寸の明珠を与えた。

『越絶書』佚文では、娘が墓から現れ歌を歌う場面で話は終わってしまっていた。宝物を渡す部分は『搜神記』を出典とするこの文章で初めて出現する。そして類書ではこの部分が注目され、宝玉部、珍宝部などに話が収録されている。ここでは呉王夫差の娘の名前は「玉」とのみ記されている。『呉越春秋』『越絶書』でも、娘の名前は「玉」の一

字が共通している。ここで話に贈物として明珠や『御覧』では崑崙玉壺が出てくるのは、贈物は娘の一種の分身であり、名前と関連付けてのことなのだろうか。

また『御覧』巻五七三・楽部・歌では、出典を『捜神記』として呉王夫差の娘である玉の死までのいきさつと、墓前に訪れた韓重の前に娘が現れて歌を歌うところまでを載せている。娘の死までのいきさつの記述はこれが類書の文章の中で一番詳しい。ここでの歌は十六句になっているが、前半八句は『越絶書』佚文と一致する。また現行の二十巻本『捜神記』では以下のように二十句となっている。

南山有烏、北山張羅。烏既高飛、羅將奈何。意欲從君、讒言孔多。悲結生疾、没命黄壚。命之不造、寃如之何。羽族之長、名為鳳凰。一日失雄、三年感傷。雖有衆烏、不為匹雙。故見鄙姿、逢君輝光。身遠心近、何當暫忘。

南の山に烏がおり、北の山には網が張ってあります。烏はもう高い所を飛んでいるのに、網が何の役に立つのでしょう。心ではあなたに従おうと願っておりましたが、讒言がとても多く、悲しい気持ちから病気になってしまい、体は黄泉の国へ行ってしまいました。命は蘇らないことをどうして怨めましょう。羽を持った種族の長は、名を鳳凰といいます。いったん夫を失えば、三年悲しみに浸るといいます。ありふれた烏といえども、再びつがいになりませぬ。それゆえ私の哀れな姿を現して、あなたの素晴らしい姿にお会いできました。身体は離れていても気持ちはすぐ側に、どうして忘れることができましょう。

この歌は様々な書に引用されていて、末尾の表のように、書物毎に語句や句数に異同があり、句数は八、十六、十八、二十と分かれる。この内十六、十八句のものはどれも『越絶書』佚文で既にみられる「烏既高飛、羅将奈何」の二句がないことから、書写の際にこの二句が抜け落ちたものと思われる。また同じ部分の欠落は、各書の参考とした書物が共通であった可能性が高いことを示しているだろう。すると、この歌には八句の短いものと二十句の長いものがあると整理される。八句のものは全て「幼玉」の話とのみ結びついているが、二十句のものは「幼玉」とは関係がなく、

より長篇化した呉王夫差の娘の話と結びついている。類書の文章は呉王夫差の娘の話が、暴君夫差の印象を強調する点から、夫差の娘と韓重との悲恋に重点が変化したことを示す材料となろう。「幼玉」という名前をもつ夫差の娘の話にのみ、娘が国を憂いて結婚を考えたとの情節が出てくるのである。また増加された歌の後半部の語句は貞節を守る鳳凰を引き合いに出しながら、娘の韓重に対する強い思いを詠んだ、悲恋の物語をより強調する内容である。

類書に引かれている『搜神記』の文章はいずれもごく短い。一番詳細な『御覧』巻五七三所引の文章でも二十巻本『搜神記』の同じ部分の文章と比較すると字数は約半分である。大筋が変わらないのに、二十巻本『搜神記』の文章の方が長いのは、会話が多く入り、文章の流れが滑らかになっている、逆にいえば同じ内容を繰り返し表現しているからである。干宝の原本『搜神記』は現代的な意味での小説として書かれたものではない。記録として書かれた書である。このような書物に無駄な繰り返しがあったとは思えない。また類書に引かれる文章の一致度が高いことからも、原本『搜神記』の文章は、『御覧』巻五七三の文章に、『類聚』や『御覧』のその他の個所にみられる、韓重を墓に招き、贈物を授けたという部分が新たに加わった程度の簡潔なものであったと推定する。

また、冒頭の四句「南山有烏、北山張羅、烏既高飛、羅當奈何」は敦煌出土の「韓朋賦」（『敦煌変文集』巻二所収）[8]の妻が夫に当てた手紙の一節にもみられる。この韓朋の話の源流はこれまた現在の二十巻本『搜神記』巻一一「韓憑」の条に求められている。[9]「韓憑」も悲恋の物語であり、宋王が韓憑の妻を奪い、妻は宋王を拒んで自殺、夫もその後を追い一緒に葬られることを望んだが、宋王の悪意により二人は向かい合わせに葬られた。すると両者の墓から木が生えてきて絡み合い、その木の上には鴛鴦が止まった、というあらすじである。そして先の「南山…」以下の四句も「青陵台歌」として後世の文献に収録されており、現在文献上では宋代まで遡ることができる。[10]

また『風雅逸篇』（明・楊慎編）巻六では、この「青陵台歌」を掲載した次に呉王夫差の娘の歌を掲載している。こ

れは編者の楊慎がこの二つの歌に関連性を認めた上での結果なのだろうか。またこの「韓朋賦」と関連のある歌謡としてもう一つ、「烏鵲歌」という歌がある。[11] この「烏鵲歌」のみられる最古の文献は『誠斎雑記』（元・林坤、一説脩達観撰）であるが、驚くべきことにここでも「烏鵲歌」のあとに「紫玉」の話が載せられており、これまでとはまた少し文章が異なっている。[12]

この様に「紫玉」と「韓憑」の話は、冒頭部分が同じ歌を持つだけでなく、何かしら密接な関係があったといえよう。ではなぜ、この様に歌い出しが同じなのだろうか。筆者は「紫玉歌」と「青陵台歌」の間に前後関係はなかったと考える。[13] この冒頭四句は『詩経』の歌い出しにみられるような後続の歌を導くための役割を果たしているように思える。張られた網よりも高い所を飛ぶ鳥は、思いを成就できない人々にとって、拘束されない自由への憧れを暗示しているのではないだろうか。「紫玉」は呉地方の話であり、「韓憑」は楚地方の話である。これら呉楚の地域に、「南山有烏…」の歌い出しがあらかじめ流伝しており、共に悲恋の物語である「紫玉」や「韓憑」の故事に関わる歌が発生する時に用いられたということではないだろうか。

また原本『捜神記』にこれらの話が収められているのは、著者である干宝の祖先が呉の地域の出身[14]であることと関わりがあるかもしれない。二十巻本『捜神記』には、同じく『呉越春秋』などに来源を持つ「鋳剣[15]」など呉楚の地域を舞台とした話が多く収められている。これらは「紫玉」と同様に原本『捜神記』の文章そのものではないにしても、干宝が出身地域の伝承を記録した名残である可能性があり、また別に探求するべき問題だろう。[16]

娘の名前

呉王夫差の娘の名前は、まず、類書に引かれる『捜神記』の文章では「玉」であり、また『広記』所引の『録異伝』でも「玉」とのみ記されている。それでは今『捜神記』に見える紫玉という名前の「紫」字はどこからきたのだろう

か。この「紫」字の由来について考えてみたい。娘の名前をはっきり紫玉としているのは『異苑』（劉宋・劉敬淑撰）巻六の「劉元」条である。

劉元字幼祖。少與武帝善而輕何無忌、遂不相得。乃去遊吳郡虎丘山、心欲留焉、夜臨風長嘯、對月鼓琴於劍池上。忽聞環珮音、一女子衣紫羅之衣、垂鈿帶、謂元曰「吳王愛女、願來相訪。」元曰「吳王愛女、豈非韓重妻紫玉耶。」即遂與劉元借行。謂元曰「聞君與劉裕相得、裕是王者、然與何無忌不美、此人恐為君患。若北還仕魏朝、官亦不減牧伯。」言訖、忽不見、乃在一大陵松樹下、約去虎丘三里許。元乃北去仕魏、累官青州刺史。

劉元、字は幼祖。若い頃から武帝（劉宋武帝劉裕、在位四二〇―四二三）と親しかった。しかし何無忌（劉裕らと共に兵を起し宋を興した）を軽蔑して、とうとう仲違いをしてしまった。そこで呉郡の虎丘山に遊んだ。ここに留まりたいと思い、夜、風に向かってうそぶき、剣池で月に向かって琴を奏でた。すると突然玉の装身具の鳴る音がして、一人の女性が紫の薄物をまとい螺鈿の帯を垂らしていた。女は元に話し掛けて「呉王の愛娘が、あなたをお慕いして参りました。」元は答えて「呉王の愛娘といえば、韓重の妻の紫玉ではないのですか。」そうして女は元と一緒に歩いた。元に対して「あなたは劉裕と仲が好いと聞いております。裕は王です。なのに何無忌を褒めなければ、この人があなたの禍となるでしょう。もし、北に戻って魏に仕えるのなら、官職は少なくとも牧伯（州郡の長官）にはなれるでしょう。」いいおわると、すぐに姿が消えた。そうして一本の大きな松の木の下にいて、虎丘から去ること、三里ばかりの所であった。元はそこで北へ行き魏に仕え青州の刺史になった。

ここでは紫玉の名がはっきりと示されている。また紫の衣裳をまとっているというのが「紫」の字の由来であることを示してくれているように思われる。話中に出てくる地名「虎丘」「剣池」は闔閭の墓にまつわる地名であり、ここでも闔閭の娘から、夫差の娘に変化したのではないかと想像させる。この紫玉は墓から現れた幽鬼であろう。この話自体には、韓重と紫玉のエピソードは出てこない。それでも「韓重妻紫玉」というだけで読者は、「紫玉」の話を思

い浮かべることができたのだろう。

『異苑』は六朝の小説集の中で、比較的原型をそのままに留めていると考えられている書物であるが、この条に関しては、劉宋の人間が、北魏に仕えることを勧める話などを書くだろうかということから、元々は『異苑』の話ではないとの考えが示されている。[17] ではいつ頃の話なのだろうか。「劉元」の条はまた、異同は少しあるものの『呉郡志』（宋・范成大撰）巻四七・異聞にも『稽神異苑』（？・無名氏撰）からとして、ほぼ同様の文を収めている。『稽神異苑』は、呉王夫差の娘の話の異なった結末を収録していた書として後に取り上げる。そこで議論するように、『稽神異苑』も呉楚の地域の伝承を収めた書物と思われ、宋代の書物に引用されていることから、宋以前に成立していたと考えられる。

更に一つ紫の衣をまとった女性の登場する話がある。『御覧』巻八〇五・珍宝部・玉に『録異伝』（『広記』の「紫玉」の話と同一出典となっていることにも注意されたい）の文として引用されている「江厳」である。

江厳常到呉採薬、及富春縣清泉山南、遥見一美女。紫衣獨踞而歌聲、有碣石之音。厳往、未及數十歩、輒去、女處唯見所踞石耳。如此數日、厳乃擊破石、遂從石中得一紫玉、廣長一尺、後不復見女。

江厳はいつも呉の地へ行き、薬草を取っていた。富春県（今の浙江省富陽県）に行った時清泉山の南に遠く一人の美女を見た。紫の衣をまとい一人たたずんで歌を歌っていて、碣石の音（不明）が聞こえた。厳が近づくと、あと数十歩という所でいつも行ってしまい、女のいた所にはただよりかかっていた石が見えるだけであった。このようにして数日が経ち、厳はとうとう石を打ち壊して石の中から紫の玉を得た。大きさは一尺で、その後再び女の姿を見ることはなかった。

この条はほぼ同様の文が『事類賦注』（宋・呉淑撰）巻九にも引かれており、また『広記』巻四〇一・玉には『列異伝』（魏・曹丕撰）の文として同じ内容のものを引く。いままで「紫玉」について論じた文章で、この江厳の話を「紫玉」

と関連付けて考えたものはみられない。確かに決定的な関連性はないが、場所が呉の地であること（清泉山については不明）などから、「劉元」と同じく、この幽鬼は呉王夫差の娘と関わりがあるのではと想像させる。

この他『楽府詩集』（宋・郭茂倩編）や『風雅逸篇』でも娘の歌を「紫玉歌」と題して収録している。このように、「紫」の字が二十巻本の恣意的な命名でないことは明らかになった。しかし、原本『捜神記』での名前は、類書の引用文からして「玉」のみであった可能性が高いと思われる。

末尾の成立

滕玉の話から幼玉の話への改変は父王が変わり、死に至る理由も違い、大きなものであるが、『越絶書』佚文の幼玉から、更に話がふくらんでいく過程では、死に至るまでの事情はほとんど変化せず、末尾に次々と情節が加わっていったように思える。類書の文章で、韓重を墓に招き、贈物を渡す場面が初めて出てきたが、二十巻本『捜神記』では更に韓重の王への挨拶、王の疑い、そして娘が韓重の冤罪を晴らす場面がある。原本『捜神記』の文章が先の推定通りならば、この末尾の部分はいつ、どのようにして成立したのだろうか。文章としてみられる最古の資料は『広記』所引の『録異伝』の文章になってしまい、二十巻本『捜神記』の文章と大差ない。なので、『広記』所引の長篇化した文章が成立した時点でこの部分が創作されたとの推測もできるかもしれないが、『広記』の成立時代よりも更に古い資料が存在する。それは白居易「霓裳羽衣歌」（『白氏文集』馬本巻二一、那波本巻五一）の一段とその句に対する自注（と思われるもの）である。

君言此舞難得人　君は言う　此の舞い人を得ること難し
須是傾城可憐女　須らく是れ　傾城の憐れむべき女なるべし
呉妖小玉飛作烟　呉の妖（わかき）小玉は飛びて煙と作り

越艶西施化為土　越の艶（えん）なる西施は化して土と為る

あなた（元稹のこと）が言うには、この舞い（霓裳羽衣歌）は踊り手を求めることが難しい、絶対に傾城の美女で可憐なる人でなくてはいけない。呉の若くて美しい人小玉は散じて煙となってしまい、越の艶なる人西施は土と化してしまった。

そしてこの小玉に次のような原注が付けられている。

夫差小玉、死後形見於王、其母抱之、霏微若烟霧散空。

夫差の娘小玉は死後姿を現して王にまみえた。母親が抱こうとすると、微かなこと煙の如く空中に散じてしまった。

呉王夫差に献上された美女である西施と対をなしている小玉は、今までみてきた呉王夫差の娘に関連する伝承のどれかを受けていることは間違いないだろう。この注は、宋版の『白氏文集』や明末の刊本である馬本にはみられるが、日本に流伝し、もっとも原著に近いとされている那波本『白居易集』にはみられない。ただ「霓裳羽衣歌」の他の句に付けられている注の内容からすると、白居易自身が付けた注のようである。とにかく、呉王夫差の娘が現れ煙となったことが中唐期に成立していたことはこれで確かとなった。また長篇化した「紫玉」条以外の資料で娘の母親が登場するのはこれだけである。ちなみに「長恨歌」にも小玉の名前が見え、呉王夫差の娘ではないかとの注釈[18]もあるが、こちらは内容上関係があるとは断言できない[19]。

またこの場合白居易はどこでこの故事を知ったのだろうか。この「霓裳羽衣歌」は宝暦一年（八二五）蘇州での作である。この時白居易は五十四歳、蘇州刺史としてこの地に赴任した。また江南地方は白居易が少年時代を過ごした場所であり、この若い頃、あるいは赴任時に紫玉の話を耳にして典故に使ったのではないかと思われる。二十巻本『搜神記』の文章自体は台詞が多く、小説的な文体であるが、話の情節自体は創作ではなく、伝承を基にしての記述

であることが判る。ただこの煙と化す部分が原本『搜神記』にもあったかは不明である。

異なる結末

しかしもう一つ「紫玉」の話に対して問題が存在する。結末の違うもう一つの話が存在し、末尾の表のように宋代以降の書物である『呉郡志』などにみえるのである。ここでは紫玉の名前は紫珪であり、呉王の夢の中に現れて、韓重の無罪を説く。

なかでも『呉郡志』の文章は、出典を『録異伝』とした『広記』と同じ文章があり、その後に「又一説」として取り上げられていて、出典を『搜神記』としているが、現行のどの『搜神記』にも見当たらない。ただし『呉郡志』の文は娘が墓から登場するところから始まっており、前半を省略してしまったようである。そこで検討するにあたって、前半部から記述のある『永楽大典』（明・解縉等編、以下『大典』と略）巻一三一三六の『稽神異苑』を出典とする文をみてみる。

呉王女紫珪、許為韓重妻。王不許、女飲氣卒。重弔塚前、女魂出、邀重入塚、贈珠並玉壺。重齎詣王、王怒、按重發塚。紫珪見夢於父、以明重事。王異之、乃捨（赦[20]）重。

呉王の娘紫珪は、韓重の妻となることを承諾していた。しかし王が許さず、女は気が昂じて死んでしまった。重が墓前で弔うと、女の魂が出てきて、重に墓に入るよう求め、珠と玉の壺を贈った。重はそれを持って王の所を訪れたが、王は怒り、重が墓を発いたのだと考えた。紫珪が夢の中で父親に会い、重のことを明らかにした。王は不思議なことだとして、重を許した。

ここで出典となっている『稽神異苑』は佚書であり、『類説』（趙宋・曾慥輯）や『呉郡志』『大典』に佚文がみられ、南朝の話を収めた書物であったようである。『稽神異苑』については李剣国「『稽神異苑』与『窮神秘苑』」という論

文があり、[21]その中でこの「紫珪」の話を取り上げている。ここでは李剣国論文の要旨を紹介しながら、その是非を検討してみたい。

李剣国論文は『稽神異苑』を『搜神記』と『異苑』の二つの書名をあわせたものではないかとの疑いを持ち、『稽神異苑』の条は多くをこの二つの書から取材しているのではないかと考えている。そして、この『呉郡志』と『大典』の「紫珪」の文がほぼ一致することから、この「紫珪」の話こそがもともとの『搜神記』の原文であると考えている。例えば、贈物について『御覧』『類聚』では玉壷と明珠をどちらか一つを贈っているが、『稽神異苑』の方は両方を贈っており、こちらが原型であると考える。これは類書が文章を収録する際、「器物・壷」「宝玉・珠」などの項目に従い、必要な部分だけを抜き出したということは大いに考えられるだろう。しかしここでこのような判断を下すのはいささか勇み足ではないだろうか。李剣国論文は先に取り上げた『異苑』の「劉元」の条が名前を紫玉としていることについて、理由は判らないが現行の『異苑』は宋刻本であって、この時にもともと紫珪であった名前が、紫玉に改められたのではないかと考えている。しかし、いままでみてきたように紫玉の元となった話でも主人公の名はみな「玉」の字を持っており、「紫珪」を原型とする根拠は薄い。

また『稽神異苑』も韓憑の話を収録していたらしく、李剣国論文ではこちらの方が敦煌出土の『韓朋賦』に近いことから『稽神異苑』の文の方が、『搜神記』の原型ではないかと考えている。しかし、『韓朋賦』の成立年代は不祥であるし、『稽神異苑』に「紫珪」や「韓憑」の話が収録されているのは、『搜神記』から取材したというよりも、『搜神記』と同じく呉楚の地域の伝承を収めた書であったために内容に重複が生じたと考える方が妥当ではないだろうか。そして、「紫珪」も「韓憑」も、原本『搜神記』よりも更に伝承の変化した形が収められているのが『稽神異苑』という書物なのであろう。ただ、性格の似通った書物であったために『呉郡志』では出典を誤って『搜神記』と記してしまったものと考えられる。

『呉郡志』や『永楽大典』巻二二五六・玉の文は更に末尾に「以子婿禮（婿の礼を以って遇した。）」との一文が付けられている。幽鬼である女性との婚姻が出世の契機となるのは後でみるように幽婚譚の典型的な型である。この結末は、幽婚譚と呼ばれる話に多くみられるもので、「紫玉」の話が他の幽婚譚からの影響を受けてこのような異なった結末ができたのではないかと考えられるのである。

紫玉と幽婚譚

前節の末尾に幽婚譚という言葉が出てきた。最後に「紫玉」条の成立の考察の総括として「紫玉」と幽婚譚の関係について考えてみたい。

幽婚譚とは死者である女性と生者である男性との婚姻を描いた話のことをいう。そしてこの幽婚譚は未婚のまま死亡した男女を合葬する「冥婚」の習俗に由来しているのではないかという見解が一般的に有力である。「紫玉」も幽鬼である紫玉と生者である韓重との婚姻を描いている点で幽婚譚の一つといえよう。しかし、筆者は「紫玉」の話を、古代の儀礼を反映した幽婚譚の中でも源流に位置するのではないかとする考えには賛成できない。またそのように考えている論考では、幼玉の話から登場した韓重を巫覡ではないかと考えているが[22]、それらの論考の根拠としている韓重の「有道術」という言葉は二十巻本『搜神記』のテキストが初めてであり、古い言い回しではないと思われるからである。韓重が娘の死を悲しんで墓に行くことはそんなに特殊なのだろうか。他にも死者を弔うために墓を訪れるという話は存在する。例えば『広記』鬼巻中では、巻三一七「田疇」（出『王子年拾遺記』）は友人が殺されたのを悲しんで墓を訪れ、友人の霊魂が出現する話だし、巻三三〇「幽州衙将」（出『本事詩』）は継母のいじめを実母の墓に訴えに行く子供たちの姿が描かれている。また巻三三四「王乙」（出『広異記』）では生前の恋人を弔いに行く男性の姿が描かれている。これらの話に儀礼的な色彩はない。

またひとくくりに幽婚譚といっても、出典が六朝期の書物である短い条では、夜、旅の一夜を借りた家の女性が実は幽鬼だったというような、婚姻よりも、生者が死者の世界に誤って迷い込んでしまった部分が強調されている話が多い。これが唐代の書物になってくると長篇化し、男女間のやり取りなどが詳細に記されていくようになる。[23] そして、六朝期では夜が明けて女性が幽鬼だったということが判るだけだったが、唐代になると、女性が男性に渡した贈物によって、女性の家に幽鬼となった娘との婚姻の事実が知られ、男性を婿として迎えるなどの対応が取られるようになる。思うに幽婚譚で女性の幽鬼が登場するといっても、冥婚の習俗と強く結びついた話の登場は唐代になってからというほうがより精確なのではないだろうか。

今までみてきたことから考えると、呉王夫差の娘の話も上記の冥婚の習俗を反映する流れの中で、末尾に新しい要素（贈物を渡すのも、娘の親に娘の婚姻が判明するのも冥婚の習俗を反映した後の幽婚譚における共通の特徴である）が加わり、長篇化したと思われる。では「紫玉」の話が現在の五百字ほどの形となったのはいつなのだろうか。まずそれには『広記』で出典としている『録異伝』について考えなければならない。『録異伝』はどの書目にも著録されていない撰者、成立年代共に不祥の書物で、魯迅『古小説鉤沈』に『初学記』（唐・徐堅等編）『御覧』『広記』などから二十七条が収められている。唐初の成立である『初学記』に引用文があることから、一般には六朝時代の成立だろうと考えられている。ならば、『広記』に収められる「紫玉」は唐以前に存在したのだろうか。前蜀に『録異記』（五代・前蜀・杜光庭撰）という書物があり、しばしば類書で引用が混同されているという。[24] 杜光庭はまた南方の浙江省の人であり、この『広記』で出典を『録異伝』としているのは『録異記』の誤りかもしれない。すなわち現在の二十巻本『搜神記』に近い（同じではない、異同については後で議論する）文章は、六朝でなく、唐代以降の成立で、遅くても五代には存在していたと考えられる。「紫玉」の場合は原本『搜神記』では幽婚の要素は現れていない。あるのは死者を弔う気持ちだけである。そしてその弔いの気持ちが、冥婚習俗や、その他の幽婚譚からの影響を受けて記述にふくらみが生じ、

成立したのが長篇化した「紫玉」なのである。ただこの長篇化も、ほとんどは伝承を基に会話部分などを増すことによってなされており、撰者による大きな情節の改変や増加はなかったと考えられる。

それでは、具体的には、どのような所に記述のふくらみが出ているのだろうか。例えば韓重が墓に来てから、紫玉と共に婚姻を挙げるまでの部分は以下のように描かれている。

重哭泣哀慟、具牲幣、往弔于墓前。玉魂從墓出、見重、流涕謂曰、「昔爾行之後、令二親從王相求、度必克從大願。不圖別後、遭命奈何。」玉乃左顧宛頸而歌曰「南山有烏…」歌畢、歔欷流涕、要重還冢。重曰「死生異路。懼有尤愆、不敢承命。」玉曰「死生異路、吾亦知之。然今一別、永無後期。子將畏我為鬼而禍子乎。欲誠所奉、寧不相信。」重感其言、送之還冢。玉與之飲讌、留三日三夜、盡夫婦之禮。

重は悲しみに泣き叫び、生け贄と供え物を用意して、弔いのために墓の前に行った。すると玉の魂が墓から出てきて、重を見ると、涙を流し「以前あなたが去った後、御両親に頼んで王に求婚して頂きました。何度もお願いすれば、必ず望み通りになると思ってましたところ、思いがけなく別れてから命を失ってしまうなんて。」といった。玉は左を見て首を曲げて歌った。「南山有烏の歌。既出。」歌い終わり、涙を流してすすり泣いて、重に墓に入るように求めた。重は「死生を別にして、過ちがあってしまってはいけません。敢えて要望は受け入れられませぬ。」といったが玉は「死生を別にしていることは、私も分かってはおります。しかし、もし今別れてしまったら、もう後に機会はありませぬ。あなたは私が幽鬼となって出てきたことを禍だとお思いですのね。誠心誠意お仕えしようというのに信じて下さらないのですね。」と述べた。重はその言葉に感動し、玉を送って墓に入った。玉と重は酒盛りをし、三日三晩留まって、夫婦の礼を尽くした。

ここで字数を割かれているのは、墓の中へと誘う紫玉とそれに躊躇する韓重の姿である。ここで鍵となる言葉は「死生異路」という言葉であり、生と死の世界を乗り越えることは当然ながら禁忌であったことが伺われる。これは一般

の幽婚譚にはみられない現象である。なぜなら、一般の幽婚譚では男性が幽鬼の女性と婚姻を結ぶ時、女性が幽鬼であることを知らないからである。両者は生前に恋愛関係はおろか、面識もないのである。相手を死者と分かっていながら、相手の望みを叶える、これが「紫玉」が幽婚譚でありながら他の話と一線を画している点であろう。

では、この様に長篇化した「紫玉」が二十巻本『捜神記』に収められていることは何を示しているのだろう。筆者は二十巻本『捜神記』が、明代になってから類書等から抜き出した文章を編纂したという『四庫総目提要』のような見解も、あながち的外れではないように思う。[25] 明代の『捜神記』の編者は『類聚』『御覧』『広記』の『捜神記』からとする文章を抜書きする際に、「紫玉」の話がより詳しく語られている『広記』の『録異伝』の文章に気がつき、こちらの方を採用したのではないだろうか。また、現行『捜神記』の配列も、明代の気風を反映している部分があるように思える。例えば、巻十六には鬼に関する話が集められ、後半に幽婚譚が集中しておかれている。『広記』では、幽婚譚は「鬼」の巻に分散して収められているのであり、その中で分離独立して項目を立てられていなかった。すなわち幽婚譚を特別視する分類概念がなかったのである。一方明末はこのような女性にまつわる話を好んでいた気風があり、紫玉の話も様々な書物に収められるようになる。[26] また、二十巻本『捜神記』の文章も、『広記』所引の『録異伝』の文章と細かな違いしかないが、その違いの中に、後世的な表現が隠れているように思われる。それは紫玉が墓から現れる場面の表現であり、類書では「形見」または「見形」、『広記』では「玉従墓側形見」となっているのに二十巻本『捜神記』では「玉魂従墓出」と紫玉の姿を「魂」の字を用いて表記している。普通唐代まで幽鬼が現れる場面では幽鬼の姿は「形」の語を用いられる。類書に引かれた「玉」の話でも表現は「形」であったし、筆者が『広記』鬼巻の幽鬼の登場場面の表現を調べたところ「見形」もしくは「形見」と表現しているものが三十例あるのに対し、「魂」字を使ったものは二例しかなく、しかも出典は共に唐代後半の書物であった。ここで「魂」字に変わっている

というのは大きな意味を持っているように思われる。「魂」とは肉体と対比されて用いられる言葉で、鬼巻の鬼の出現場面以外での「魂」字の使用例では、死体が別所に合った上で幽鬼が姿を見せている時にみられる。例えば巻三二二「遠学諸生」（出『続搜神記』）では遊学先で死んだ息子が両親の目の前に現れて「今我但魂魄耳、非復生人（今の私は魂魄のみで、生き返ったのではありません）。」と述べている。ではなぜ二十巻本『搜神記』の「紫玉」では「魂」の字に変わったのだろうか。ただ幽鬼が現れたのならば、ただ姿を現したという事実の記述として「見形」の表現を用いるのが一般的な記述であったが、韓重にとってこの幽鬼は、生前結婚の約束を交わした愛する女性である。そこでただの「形」ではなく、より美しい表現として「魂」の字を用いたのではないだろうか。また、先にみた『永楽大典』の文章でも娘の出現を「女魂出」と表現していた。そのために、また『稽神異苑』を出典とする異なった結末の文章表現はそう古いものでないと筆者には感じられるのである。とにかく、二十巻本『搜神記』の文章は、古い書物の文章を引用しつつも、意識的にか無意識にか表現を改変しているといえるだろう。

結　語

今回「紫玉」という一編の話を分析することで、小説資料を扱う際には、その成立年代を安易に決定できないことが明らかになった。筆者は五百字の「紫玉」の文章も古い時代のものでないからといって否定するつもりはない。ただ正しい考証を行うことで、文章の本来の性質をより深く理解できるのではないだろうか。原本『搜神記』に収められていた呉王夫差の娘の話は、地域に伝わっていた伝承を記録した簡素なものであったと思われる。これは原本『搜神記』について考察する手がかりとなるだろう。それに対し表現をふくらませたのが現在の「紫玉」であろう。そして、現行の二十巻本『搜神記』にこの「紫玉」条が収められていることを考察することも、またこれはこれで現在存在する『搜神記』について考えるための材料を与えてくれているのである。

注

(1) 森野繁夫「搜神記の編目」(『広島大学文学部紀要(文学)』二四―三　一九六五)参照。

(2) 例えば柳瀬喜代志氏の一連の論考―「童謡考―「由拳陥没為湖」話をめぐって―」(『中国詩文論叢』五　一九八六)、「『文選』注引の『搜神記』説話をめぐって―二十巻本『搜神記』再編考―」(『中国文学研究』一五　一九八九)、「「鳧履登朝」譚をめぐって―二十巻本『搜神記』再編考―」(『中国詩文論叢』九　一九九〇)、「『淮南子』所出「東海孝婦」話をめぐって―二十巻本『搜神記』再編考―」(『中国詩文論叢』一二　一九九三)―は、様々な古籍に引用されている『搜神記』の文章を検討した上で、現在の二十巻本『搜神記』は原本とは異なるものだと結論している。ただしこれらの佚文資料と現在の二十巻本『搜神記』との関係に対する考察はあまりなされていない。

(3) 王紹楹校点『搜神記』(学津討原本底本　中華書局一九七九)ほか、許建新『搜神記』校注」(『国立台湾師範大学国文研究所集刊』一九　一九七五)など。

(4) 李剣国「〝鬼董狐〟干宝的『搜神記』」(『唐前志怪小説史』　南開大学出版社一九八四)二九九頁及び『中国小説百科全書』(中国百科全書出版社一九九三)「呉女紫玉」の項(執筆者許逸民)。

(5) 『芸文類聚』巻七三・雑器物部・鼎、巻九〇・鳥部・白鶴及び『文選』巻一四・鮑照「舞鶴賦」注、『北堂書鈔』巻九二・葬、『御覧』巻五五六・儀礼部・葬送、『白孔六帖』巻九四。また『呉郡志』巻三九・塚墓にも出典を記していない同様の文が載せられている。

(6) 陳中凡「論『呉越春秋』為漢晋間的説部及其在芸術上的成就」(『文学遺産増刊』七　中華書局一九五九)でも『呉越春秋』の内容を民間伝説と史実が交じり合ったものとしている。

(7) 皮日休「女墳湖」「萬貴千奢已寂寥／可憐幽憤為誰嬌／須知韓重相思骨／直在芙蓉向下消。」陸亀蒙「和女墳湖」「水平波淡遶回塘／鶴殉人沈萬古傷／應是離魂雙不得／至今沙上少鴛鴦。」皮日休の詩では韓重の名前がみえるのに対して、陸亀蒙の詩では「鶴殉人沈」の句があり園間の娘の話を踏まえていると思われる。

(8) 「韓朋賦」及び「韓憑」については、容肇祖「敦煌本韓朋賦考」(『慶祝蔡元培先生六十五歳論文集下冊』中央研究院歴史言語研究所集刊外編第一種鉛印本一九三五)、陳麗卿『韓憑故事研究』(私立中国文化大学中国文化研究所碩士論文一九八七)など多

数ある。

(9) ただしこの条についても干宝自身が晋の時代に著したものと安易にみなすことはできないだろう。しかし粕谷興紀「捜神記の受容―一佚文をめぐって―」(『万葉』七七　一九七一)四七―四八頁に『古事記』垂仁天皇記の話に「韓憑」条と類似した表現があることが指摘され、また柳瀬喜代志一九九三、三一頁には『将門記』に「韓朋」の話を踏まえた表現があることから原本の『捜神記』には「韓朋」の条があった可能性があるのではないかという考えが示されている。平安初頭成立の『日本国見在書目』に『捜神記』三十巻の記録がみえ、このように日本の文献の中にも存在の証拠が窺えることから、「韓憑」条が何等かの形で原本『捜神記』に収録されていた可能性は高いと思われる。

(10) 容肇祖一九三五参照。

(11) 「烏鵲雙飛／不樂鳳凰／妾是庶人／不樂宋王。」の四句。

(12) 『誠斎雑記』巻上「呉王夫差小女、名紫玉。悦士子韓重、欲嫁之。不得乃結氣死。重游學歸知之、往弔於墓側。玉見形、抱重延頸而歌。」これも紫玉の話の伝播という点では興味深いが今回は議論しない。

(13) 陳麗卿一九八七、六一頁では『捜神記』紫玉条中の歌の存在を指摘し、この歌が後に韓朋故事に取り入れられたと考えているがこの意見には従わない。

(14) 『晋書』巻八二・干宝伝参照。

(15) 「鋳剣」については細谷章子「干将莫邪説話の展開」(『文化』三三　一九六九)及び高橋稔「眉間尺故事―中国古代の民間伝承―」(『中国の古典文学―作品選読―』伊藤漱平編　東京大学出版会一九八一)が詳しい。

(16) 狩野直禎「干宝とその周辺―江南文化の一考察―」(『古代学』一八―一　一九七二)四六頁では『捜神記』に長江流域等の説話が多く収められていることが指摘されている。

(17) 『中国小説百科全書』(前出)「異苑」の項(執筆者李剣国)

(18) 許建新一九七五参照。

(19) 「金闕西廂叩玉扃／轉教小玉報雙成。」の句。更に白居易「伊州」にも、「老去將何敬老愁／斷教小玉唱伊州／亦應不得多年聽／未教成時已白頭。」と小玉が登場しているが、こちらも全く呉王夫差の娘の話とは関連がなさそうである

(20) 上に引いた文の末尾「捨重」は意味がよく通じない。これは『呉郡志』も同じである。『呉郡志』をそのまま襲ったとみられ

る『呉都文粋』では、「捨」の字が「赦」になっている。訳はこちらの字に従って付けた。

(21)『中華文史論叢』一九八七―一（総第四一期）

(22) 中鉢雅量『中国の祭祀と文学』（創文社一九八九）二二〇頁、及び黒田真美子「六朝・唐代における幽婚譚の登場人物―神婚譚との比較―」（『日本中国学会報』四八　一九九六）一二五頁。

(23) 黒田真美子「六朝・唐代の幽婚譚について」（『竹田先生退官記念東アジア論叢』汲古書院一九九一）参照。

(24) 李剣国『唐・五代志怪伝奇叙録』（南開大学出版社　一九九三）「録異記」の項、一〇五四頁参照。

(25) 小南一郎「干宝「捜神記」の編纂（下）」（『東方学報（京都）』七〇　一九九八）一〇五―一一一頁でも現行二十巻本は、明末の姚士粦と胡震亨の手によって編集し直された可能性が高いとし、原本の構成は現行二十巻本に反映されていないと論証している。

(26) 明末以降の書物で「紫玉」条を収めている書名を参考に挙げる。『郷邪代酔編』巻三二、『才鬼記』巻一、『五朝小説』魏晋小説伝奇家、『緑窓女史』冥感部・幽合、『剪灯叢話』巻五、『艶異編』巻三六・鬼、『太平広記鈔』巻五九・鬼部・鬼、『情史』巻十・情霊類。

附：呉王の娘の故事収録一覧

＊配列は、議論の順序による。なお句数とは挿入歌の句数のことである。

書名	名前	句数	出典	備考
『呉越春秋』闔閭内伝第四	滕玉	なし	なし	
『呉地記』	幼玉	八	『越絶書』	現行の『越絶書』にはなし
『呉郡図経記』巻下・塚墓	幼玉	八	なし	語釈付き（注）
『類聚』巻八四・宝玉部・珠	玉	なし	『捜神記』	贈物：明珠
『御覧』巻七六一・器物部・壺	玉	なし	『捜神記』	贈物：崑崙玉壺
『御覧』巻八〇三・珍宝部・珠	玉	なし	『捜神記』	贈物：明珠
『御覧』巻八〇五・珍宝部・玉	玉	なし	『捜神記』	贈物：崑崙玉盃

『太平寰宇記』巻九一・蘇州	なし	なし	『山川記』	贈物：明珠
『御覧』巻五七三・樂部・歌	玉	十六	『搜神記』	「烏既高飛、羅將奈何」「雖有衆烏、不為匹雙」なし
『樂府詩集』巻八三「紫玉歌」	紫玉	十八	なし	「烏既高飛、羅將奈何」なし
『太平広記』巻三一六「韓重」	玉	十八	『録異伝』	「烏既高飛、羅將奈何」なし
『風雅逸篇』巻六「紫玉歌」	紫玉	十八	なし	「烏既高飛、羅將奈何」なし
『呉郡志』巻四七・異聞	玉	二十	『録異伝』	『広記』の文と同じ
『呉都文粋』巻十「塚歌」	玉	二十	『録異伝』	『広記』の文と同じ
『搜神記』巻一六「紫玉」	紫玉	二十	なし	贈物：明珠
『古謡諺』巻六六	紫玉	二十	なし	二十巻本『搜神記』の文を引く
『誠斎雑記』巻上	紫玉	なし	なし	他書にみられない文章
『呉郡志』巻四七・異聞	紫珪	なし	『搜神記』	贈物：珠、玉壷
『呉都文粋』巻一〇・塚歌	紫珪	なし	『搜神記』	贈物：珠、玉壷
『永楽大典』巻二二五六・玉	紫珪	なし	『稽神異苑』	贈物：白玉壷
『永楽大典』巻一三一三六・夢	紫珪	なし	『稽神異苑』	贈物：珠、玉壷

(注) 呉越のありさまに結び付けて解釈した以下のような注文が附されている。これは撰者の朱長文が付けたものなのだろうか。「竊謂此詩亦有深旨。殆此女生時所賦耶。南山有烏、喩越也。北山張羅、喩制越非其所也。烏既高飛。句踐之盛也。羅將奈何、夫差不可以制越也。志欲從君、讒言孔多、謂雖欲從父之命、奈何其聽讒言而忘忠義也。彼韓重之怨、蒸魚之忿、殆恐非也。墳之為湖。或曰墓所陷也。或曰取土為墳、鑿而成也。」